令和２年（2020年）7月30日発行

長野県の埋蔵文化財情報誌

小島・柳原遺跡群出土

信州の遺跡

第15号

最新報告書から１

中世の寺院跡を発掘！　佐久市　地家（ちけ）遺跡

地家遺跡は八ヶ岳連峰から北東に延びる丘陵先端に立地する。発掘調査で13～15世紀の寺院跡が姿を現した。東に開ける谷の底部を造成した平坦地に仏堂や倉庫などの建物群が営まれ、周囲の斜面部には蔵骨器や多数の五輪塔・板碑を伴う墓域が展開する。建物群南側の自然流路跡からは「百劫種相三十二六度満足」と記した木簡をはじめとした仏教関連品のほか、箸・下駄などの生活関連品、建築部材や端材など多種多様の木製品が出土した。この地には平安時代から戦国時代にかけて旧長命寺があったと伝えられ、検出した寺院跡は中世長命寺の可能性が高い。　（若林　卓）

蔵骨器（美濃須衛産四耳壺）

木簡

遺跡全景（東から）

板碑

最新報告書から2

弥生時代後期の拠点的な集落跡とさまざまな墓　佐久市　北裏（きたうら）遺跡群

北裏遺跡群は、佐久市南西部の千曲川左岸の段丘に立地する。弥生時代後期中頃を中心とする集落跡を調査し、千曲川左岸側を代表する拠点的集落が明らかになった。土器は長野盆地と共通の文様で、佐久の地域色が強い右岸側の土器とは差がある。また、木棺墓の上に多数の土器を供えて火を焚いた、佐久地方独特の儀礼を行った墓が見つかった。他に弥生時代後期から古墳時代前期まで、形態・規模の変遷がたどれる方形・円形周溝墓群を検出した。

（綿田弘実）

弥生後期木棺墓の遺物出土状況

北裏遺跡群空撮（西から）

木棺墓出土土器

最新報告書から3

槍先形尖頭器の製作遺跡　佐久穂町　満り久保（まくぼ）遺跡

満り久保遺跡は八ヶ岳北麓から東側へ伸びる丘陵末端部にあり、大石川と千曲川の合流地点に立地する。発掘調査で、旧石器時代末の黒曜石製の槍先形尖頭器と未製品、製作時の剥片が出土し、この遺跡は槍先形尖頭器の製作址であると分かった。産地推定分析の結果、黒曜石の多くは大石川源流で産出する蓼科冷山産で、満り久保遺跡が原産地と消費地を結ぶ、黒曜石流通ルートの中継地点的な場所であったと推測できる。（贄田 明）

槍先形尖頭器

槍先形尖頭器の未製品

最新報告書から4

水利の拠点か？　長野市　小島（こじま）・柳原（やなぎはら）遺跡群

小島・柳原遺跡群は、長野市東部千曲川左岸の自然堤防上に立地する。今回の調査では、平安時代と中近世の遺構遺物がみつかっている。平安時代中期を中心とした竪穴建物跡が展開し、うち1軒からは奈良時代末平安時代初頭に遡る仏具（塔鋺形合子）の蓋が出土した。中世は墓や土坑群、溝跡だけで建物跡はみつかっていない。しかし、古代や中世の遺構は、長野盆地の条里地割に沿っているものが多く、中でも、調査区をほぼ南北に縦断し、現在も水利施設として重要な役割を果たしている村山堰と北八幡川をつなぐ幅6m、深さ2mを越える中世の大溝跡が検出されたことから、当地が中世あるいは古代にも水利の拠点であったことがうかがえる。（寺内貴美子）

遺跡遠景（南西から）

塔鋺形合子蓋

中世の大溝跡

最新報告書から5

発見から半世紀 栃原岩陰遺跡を再検討！

北相木村　栃原岩陰遺跡（とちばらいわかげ）

2019（令和元）年10月、1965（昭和40）年11月の人骨発見から半世紀以上が過ぎ、栃原岩陰遺跡の発掘調査報告書が刊行された。

栃原岩陰遺跡は、標高約930m、相木川右岸に位置する浅い洞窟状の遺跡。未報告であった調査区からは、主に縄文早期の土器、石器の他、12体の人骨、10万点を超える動物骨、釣針や縫針を含む多数の骨角器、130点に及ぶ海生貝、そして炭化した植物遺体など、実に多種多様な遺物が、深さ560cmに及ぶ遺物包含層から出土している。炉の数も100を超える。

報告書をまとめるにあたり、これらを再確認し遺跡の変遷の復元を試みた。その結果、従来からの指摘を追認しつつ、縄文早期前半のおよそ11000～9500年前の間に、居住空間としての利用頻度の多寡や、墓域としての利用時期の存在が浮かび上がっている。

（北相木村教育委員会　藤森英二）

報告書表紙

人骨の出土状況

アオザメの歯、タカラガイなど海由来の遺物

装身具を含んだ骨角器

※写真提供：北相木村教育委員会

弥生時代終末期の「丸い」墳丘墓？

木島平村　平塚（ひらつか）遺跡

平塚遺跡は扇状地の端部に立地する独立丘陵「平塚山」にある。調査を行なった山頂部には、中央に一辺約 13m、高さ 1.4m ほどの方形台状のマウンドが残っていた。この内部から、弥生時代後期から中世にかけての遺構が重層的に発見された。

マウンドは弥生後期の建物を破壊して造られ、頂部から通路と土坑が一体化したような特殊遺構が掘り込まれていた。出土品は皆無だが、規模や構築法、土層の堆積状況等から弥生時代終末期の墳丘墓と推測された。仮に墳丘墓であれば、根塚遺跡の後継に当たる可能性があり貴重である。

中世に墓域として転用され、近世に信仰に関わる塚として伝わったこの遺跡は、内容確認の調査を経て保存されている。（木島平村教育委員会　室 正一）

平塚山全景（東から）

墳丘部分の検出

調査区全景

墳丘内の特殊遺構

※写真提供：木島平村教育委員会

特集　埋文展示室から

長野市 浅川扇状地遺跡群 出土
―逆ハート形の猪目墨書土器―

本遺跡群では、底部に墨で逆ハート形のような文様が描かれた須恵器の坏が出土した。時期は８世紀後半から９世紀前半にあたる。この文様は「猪目（いのめ）」と呼ばれ、ハート形を逆にしたのが本来の向きである。イノシシの目を象（かたど）ったものといわれ、古くから魔除けや火除けのシンボルとされてきた。遺跡群内ではこの猪目墨書土器が複数確認されており、いずれも桐原牧神社付近に集中していることが注目される。（伊藤　愛）

猪目墨書土器

長野市 塩崎遺跡群 出土
―自然堤防上の古墳から出土した長胴の壺形土器―

長野市の南部、塩崎地区の篠山山麓に30基あまりの古墳が知られているが、千曲川の自然堤防上に立地する塩崎遺跡群でも古墳時代の円墳周溝が２基みつかった。その１基から長胴の底部に穴の開けられた長胴の壺形土器が複数出土した。埴輪と同様に古墳に配置されたとみられ、類例は長野県北部に顕著にみられる。（市川隆之）

古墳周溝の遺物出土状況

底部穿孔の壺形土器

長野市 石川条里遺跡 出土
―古墳時代の小型丸底土器―

遺物集中での作業風景

小型丸底土器

千曲川左岸の後背湿地に立地する本遺跡では、古墳時代の遺物集中から多量の木材と土器等の遺物が出土した。土器のなかでも、古墳時代前期の小型丸底土器が10点以上確認されており、加えてこれを模したミニチュア土器や高坏もみられた。小型丸底土器は底部が丸く、祭祀で使用されることが多く、供献用の土器と考えられている。遺物集中からは写真のように口縁部を欠損したものが多くみられた。調査区周辺で行われた祭祀に使われた後に、まとめて廃棄されたものと考えられる。（河西克造）

中野市 南大原遺跡 出土
―弥生時代の鉄加工関連遺物―

遺跡遠景（南西から）

小鉄片（鉄器加工の切り屑）

2019（令和元）年度の調査から、千曲川下流域の南大原遺跡では、約2,100年前（弥生時代中期後半）にはすでに鉄器加工を行っていたことが明らかになった。本遺跡の下流7kmには、同時期に青銅器祭祀を執り行った柳沢遺跡がある。この一帯の集落がいち早く当時の先進技術や習俗を受容できたことは、日本海ルート（北部九州－中国・近畿－北陸を結ぶ流通ネットワーク）と内陸部を結ぶ中継点の役割を担っていたからではなかろうか。（柳澤　亮）

利用案内

☆公 開 日 ：月～金曜日（年末年始・お盆休み・祝日を除く）
☆公開時間：午前９時から午後５時まで
☆入場無料です。ご入場の際は、１階管理部で受付して下さい。
※団体での御利用は事前に連絡をお願いします。
※マスクの着用・入室時のアルコール消毒・連絡先の記入をお願いしています。

考古学の窓　甦る古代の輝き－塔鋺形合子－

平成28（2016）年10月7日、長野市中心部から平林街道を経て、須坂市へとほぼ東に道は続いている。国道と千曲川がクロスする部分に鉄道道路併用で有名な村山橋がある。その橋西側、自然堤防上の小島・柳原遺跡群で、古代竪穴建物跡から金属製の蓋が出土した。後世のかく乱が及んでおらず、出土状況からは、古代遺物であることは間違いない。しかし、その不思議な形から、現代の金属工芸品ではないかと目を疑った。

このオーパーツ（out-of-place artifacts：場違いな工芸品）は、加持祈祷（除災、招福などを目的とする修法）で用いる塔鋺形合子であり、正倉院等をふくめ、全国で25例しか伝わっていない（県内初）。

塔鋺形合子の模造品

こうした非常に限られた古代寺院にしかないような密教法具が、遺跡の分析では、なぜかこの地点に遺棄されていた。謎は深まる。遺物の意義を分析するには、まずは、出土状況例の増加を望むしかないが、それ以外にもできることはないか。

私ごとではあるが、令和最初の年明けに善光寺大勧進の護摩を焚いてもらった。あたかも不動明王の霊験を示すかのように、護摩壇のまわりの法具は、燃え盛る炎とともに神々しく光り輝いていた。無論、単純な比較は慎むべきであろうが、出土品は錆びているが、本来はおそらく金属光沢を放っていた。その幾何学的なフォルムとともに、こうした工芸品が極めて少ない古代人の心には、とくに訴えるものがあっただろう。

センターでは、地元業者の協力により非接触3次元測量と旋盤などの最新技術を活用して、失われた脚とともに、古代の輝きや質感に迫る模造品を製作した。古来、「格物致知」（モノと格闘することによって、知を得る）という。材質や法量だけでなく、光沢や質感といった当時の姿に迫った模造品は出前講座などで御披露できる。私たちともども五感で得られるものを共有させていただき、そこから合子の意味を考えていきたい。

（川崎　保）

編集後記

昨年度刊行された報告書を取り上げ紹介した。地家遺跡出土の美濃須衛産四耳壺は、同じく当センターの若林が調査した坂城町観音平経塚の古瀬戸四耳壺とともに、平安時代末から鎌倉時代前期にかけての東海産壺類の希少な出土例となる。両者はいずれも中国産四耳壺をモデルに作られた優美な一品である。中世には寺院や武士等が京都―地方のネットワークをつくるなかで、京都と信濃の往来や、寺院のつながりで贈答品として運ばれてきたのかもしれない。どんな「縁」で運び込まれたのか、今後とも注目したい一品である。（市川隆之）

古瀬戸四耳壺（観音平経塚）

本号で掲載した遺跡位置

（一財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007　長野市篠ノ井布施高田963-4
TEL 026-293-5926　FAX 026-293-8157
http://naganomaibun.or.jp/　印刷：奥山印刷工業株式会社
この冊子は、令和2年度 地域の特色ある埋蔵文化財活用事業で作成しました。